

## but をとらして見る報道文の談話構造

田邊 希久子

(青山学院大学大学院)

*This paper analyses the discourse structure of newsreports in English through an analysis of the discourse connective 'but.' Its goal is to make it easier for Japanese translators, interpreters and students to understand and translate the rhetoric of English newsreports. The connective's meanings and discoursal functions have been dealt with in many preceding papers. This paper refers to the discourse structure model of newspaper editorials cited in Bolívar (1994) and, making use of her triad model, compares the connective's rhetorical functions in newsreports and novels, in order to show the function of but as an tool to present writer's evaluation within the three-part argumentative structure.*

### はじめに

本論の目的は、翻訳・通訳の実践に役立てることを目的として、英語の報道文における談話の展開のしかたを、**but** という語を通して探ることである。具体的には、報道文におけるこの語の使われ方を他のテキストタイプ（小説）と比較する。

著者が行った調査によれば、報道文と小説における **but** の使用頻度にほとんど差はなく、しかもセンテンス・レベルで従来指摘されてきた「対比」と「期待の否認」の2つの用法のうち、後者が圧倒的多数を占める点も同じであった。したがって、報道文における **but** の使われ方の特徴は、センテンス・レベルより上の談話レベルにあることは明らかである。

そこで談話構造、および話者・書き手の行為としての「評価」という観点からサンプルを分析したところ、英語の報道文にはリード、フォロー、ヴァリュエートといった3段階式の談話構造が多く見られること、また **but** の導く談話単位が「話者・書き

---

TANABE Kikuko, "Discourse Structure of English Newsreports as seen from an Analysis of Discourse Connective 'but'." *Interpretation Studies*, No. 2, December 2002, pages 99-113.

(c) 2002 by the Japan Association for Interpretation Studies

手の評価」を示す場合が多いことがわかった。本論ではこれに基づき、そうした **but** の機能がどのように翻訳・通訳されているかについても検討する。

## 1. 先行研究

### 1.1 R. Lakoff (1971)

Lakoff は「意味的対立 (semantic opposition)」と「期待の否認 (denial of expectation)」という **but** の 2 つの用法を記述的に分析している。それによれば、「意味的対立」の用法では、前件と後件の語彙項目の意味的対立が示される一方、「期待の否認」の用法では前件の前提を後件が否認する。以下は Lakoff が示した用例で、(1a) が「期待の否認」、(1b) が「意味的対立」の用例である。

- (1) a. John is tall but he's no good at basketball.  
b. John is tall but Bill is short.

(1a) の前件には、If someone is tall, then one would expect him to be good at basketball. という前提(期待)が存在し、これが後件 John is no good at basketball. によって否認される。そして「期待の否認」が成り立つためには、世界知や発話の背景となる状況などの前提だけでなく、論理的推論 (deduction) も動員される。そして「期待の否認」の **but** は **although** で置き換えられるとされている。

一方、(1b) のような「意味的対立」の用法では語彙項目が意味上の対立を示す。たとえ前件の前提が文の成立に必要な場合でも、その前提は語彙項目に内在するとされる。

以上のように、Lakoff の分析では「対立」の **but** は意味レベルで、「期待の否認」の **but** は語用レベルで機能すると分析されている。

### 1.2 D. Blakemore (1987)

関連性理論では、発話に対する聞き手の解釈のあり方は (1) 最大の関連性を、(2) 最小限の労力で得ようとするとして説明される。Blakemore (1992 : 136-137) はこの理論を踏まえ、発話の命題内容には全く貢献せず、関連性のあり方に制限を加えることのみを機能とする言語的ツールのひとつとして談話連結語 (discourse connectives) を挙げている。

すなわち、以下 (2) の対話において、A の発話は B の発話を解釈するための文脈を構成するが、正しい解釈が何であるかははっきりしない。ところが B が (3a) のように発話した場合、**so** は聞き手に後続発話を先行発話の文脈効果として同定させる機能を持ち、(3b) と答えた場合は、**however** が聞き手に対し、後続発話を先行発話に対比するものとして同定させるという機能をもつ。この **so** や **however** を談話連結語と

称し、発話に対する聞き手の解釈のあり方を制限するとされる。

- (2) A: Susan's not coming today.  
B: Tom's in town.
- (3) a. So Tom's in town.  
b. However, Tom's in town.

Blakemore (1987) は *but* について同様の分析を行っている。すなわち R. Lakoff (1971) による「期待の否認」と「意味的対立」という分類を踏まえたうえで、上記の考察から *but* の機能を「期待の否認」と「対比 (contrast)」に分類している。すなわち Lakoff が *but* の意味を多義としているのに対し、Blakemore は基本的に *but* の意味は単一（すなわち「命題 P の否定」）であり、2 種の用法が生じるのは、前件と後件のそれぞれに関連性が求められるか、それとも連結命題として文全体に関連性が求められるかの違いに由来するとしている。

Blakemore はさらに、2 種の用法を見分ける方法として、「対比」においては (1) 前件と後件をピリオドで区切っても真偽条件が変わらない、(2) *but* を *and* で置き換えても真偽条件が変わらない、(3) 埋め込み文にすることができる（例えば *If Susan is coming but Anne is not, then I shall cancel the lecture.* というように）—— という 3 つの方法を挙げている。

Blakemore は *but* の核となる機能は「命題 P の否定」であり、前件と後件の指示内容が矛盾する場合は前件ないしその前提を棄却しなければならないため「期待の否認」となり、そうでない場合は「対比」になるのだと説明している。*Newsweek* からそのことを示す文例を挙げる。

- (4) Edward Kennedy, the paterfamilias, wanted a large, public ceremony. But JFK's sister, Caroline, insisted on a small, private service.

(*Newsweek*, August 2, 1999)

(4) を単純化すると *Edward wanted a large ceremony, but Caroline insisted on a small service.* となる。葬儀は 1 回きりだったことを考えれば、前件と後件は両立しえず、どちらかの命題を放棄しなければならない。従って、この *but* は「期待の否認」となる。つまり本来なら一族の長老である Edward の意向が通るという前提が、後件によって否定されたと解釈できる。一方、Edward と Caroline の意向が同等の重みをもつと考えれば、前件と後件は両立しうることになり、*but* の意味は「対比」ということになる。

以上のように Blakemore は、前件と後件の関連性のあり方によって「対比」と「期

待の否認」の用法に分かれるだけであり、**but** の核となる機能は「命題 P の否定」にあるとしている点で、**but** に 2 つの意味があるとする Lakoff の分析と一線を画している。

### 1.3 D. Schiffrin (1987)

以上の Lakoff や Blakemore はセンテンス・レベルの分析だが、Schiffrin (1987) は談話分析の立場から談話標識 (discourse marker) としての **but** の機能を分析している。すなわちセンテンス・レベルだけでなく談話レベルにも言及し、**but** の核となる機能を「対比 (contrast)」としている。Blakemore のような「否認」「否定」という言葉を使わず、「対比」という表現を選んだのは、談話レベルの **but** には意図レベル、発話内行為レベルなど、さまざまなレベルの機能が存在すること (松尾 2000) を考慮していることだろう。

ところで Schiffrin は、議論 argument における談話単位の機能として、POSITION (立場)、SUPPORT (支持)、DISPUTE (反対) の 3 種を挙げている。(5) は異教徒同士の結婚をめぐるある話者の発言を談話構造的に分析したものである。話者の発言にある **but** は、(g)では SUPPORT を、(p)では POSITION を、また (z) ではその両方を導いている。

- (5) POSITION 1 : I'm against intermarriage  
 SUPPORT 1 : Jews face intolerance  
 IF NOT [SUPPORT] THEN NOT [POSITION] (b~f)  
 If Jews faced tolerance,  
 then I would not be against intermarriage.  
**but** SUPPORT 1 : Jews face intolerance (a, g-o)  
**but** POSITION 2 : Jews provide tolerance (p)  
 SUPPORT 2 : We are kind to all (q-w)  
**so** POSITION 2 : Jews provide tolerance (y)  
**but** SUPPORT 1 : Jews face intolerance (z-aa)  
 (Schiffrin : 1987, p.155)

このように、**but** が導く談話の機能は一様ではない。むしろ話者と聞き手の相互行為から生み出される期待 (expectation) —例えば対話の相手が期待している答え、あるいはトピックなど—への対比を標示するという点に、**but** の機能があると Schiffrin は分析する。

一方、隣接ペアを超えたより大きな談話行為に関しては、Schiffrin は **but** を「話者の当初の主張に戻る装置 (speaker-return point-making device)」としている。

以上、三者の分析を表にまとめると、以下のようなになる (表 1)。

表 1 but の機能

	語彙	センテンス・レベル	談話レベル	相互行為
R.Lakoff	意味的対立	期待の否認		
Blakemore	命題 P の否定	対比 期待の否認		
Shiffrin	←—————	(期待への) 対比	—————→	話者の 主張に戻る

以上の先行研究を踏まえ、以下では実際のサンプルの分析を行っていく。

## 2. サンプル分析とその視点

### 2.1 調査対象

本論では、時事報道文のサンプルとして *Newsweek* の記事 7 本と CNN のニュース記事 13 本、小説のサンプルとしてスタインベックの『逃走 (*Flight*)』とビアスの『ハルピン・フレイザーの死 (*The Death of Halpin Frayser*)』を取り上げる（データの出典は資料 1 参照）。分析にあたっては次のような条件を設けた。

a) サンプルを選ぶ過程で、会話文の多用された小説では **but** の出現頻度が高くなることがわかった。これは会話文において **but** が頻用されるためと考えられる。従って、なるべく会話文の少ない小説を選び、小説、報道文ともに会話中の **but** はカウントしないこととした。

b) イディオム化している **but** の用法は除外した (*not...but*、*anything but*、*all but* など)。

## 2.2 分析の視点

### 2.2.1 センテンス・レベル

前節で紹介した Blakemore の分析に基づき、文中の **but** の機能がセンテンス・レベルに存する場合は「対比」と「期待の否認」の 2 種に分類し、出現頻度を比較した。

### 2.2.2 談話構造

談話構造に関する分析は Mann & Thompson (1988) など多数あるが、ここでは新聞論説を対象にした Bolivar (1994) の分析方法を採用する。

Bolivar は新聞論説の分析に、LFV というトライアド (3 段階式) の談話構造モデルを採用している。3 段階式の談話構造は本名 (1989) など多くの先行研究において

指摘されている。前節で取り上げた Schiffrin (1987) も、議論 *argument* の談話に POSITION、SUPPORT、DISPUTE の 3 種の談話単位を規定している。

Bolivar は書き言葉の基本的な談話単位としてターン *turn* (Tn) を規定し、その機能を情報伝達と評価にあるとしている。ターンは単一ないし複数のセンテンスからなり、機能別にリード (L)、フォロー (F)、ヴァリュエート (V) の 3 種類に分けられる。(6) はその一例である。

(6) Tn S

- L 1 Britain and Ireland are now trying, at long last, to work out a less artificial link between them than that which binds two foreign states.
- F 2 This is the most hopeful departure of the past decade because it opens for inspection what had lain concealed for half a century and goes to the root of the anguish in Northern Ireland.
- V 3 The two countries now recognise that though they are independent of one another they cannot be foreign.

(Bolivar : 1994, p.279)

上記のように、L はトライアド全体の概要、ないし論述の姿勢やモダリティを先行的に示し、フォローはリードを受けてトピックを継承・発展、ないし評価する。さらに V はトライアドを締めくくり、LF 双方に対する評価を行う。ターンの転換はテンス、ムード、モダリティの転換によって標示され、同一のテンス、ムード、モダリティ、あるいは書き手の姿勢を示すセンテンスは同一ターンに分類することができる。

以上は「コンテンツ・トライアド *content triad*」と呼ばれるもので、LFV のいずれをも含み、LFLFV、LFLFLFV などの形もありえる。

Bolivar はさらに、ターンより上位の談話単位としてムーヴメント *movement* (Mv)、アーテファクト *artefact* を設定し、上記の「コンテンツ・トライアド」とは別の、談話処理の機能をもつ「バウンダリー・トライアド *boundary triad*」を規定している。「バウンダリー・トライアド」は SDR と SDR の間にしか現れず、必ずしも L F V が全てそろっているわけではない。そしてムーヴメント—シチュエーション (S)、デヴェロプメント (D)、リコメンデーション (RR) からなる (資料 2 参照) —をつなぎ合わせる機能をもつとされる。

Bolivar は以上の談話モデルによって実際の新聞論説を分析し、トライアド・モデルの有効性を主張している。

Bolivar の分析は本来、議論を目的とするテキストを対象にしたもので、物語 *narrative* である小説の分析にはなじまない。しかし本調査では比較のため、小説に対しても LFV 構造をあてはめて分析を試みることにする。

### 2.2.3 発話内行為

1.3 で述べたように、Schiffrin (1987) は **but** があらゆる機能の談話単位を導きうることを指摘しているが、書き言葉を対象とする本調査でも、**but** が *Bolivar* のいう LFV のいずれをも導くことが確認できた。そこで、報道文の談話構造と **but** の関係をさらに鮮明にするため、**but** が導く談話単位を発話内行為の面からも分析することとした。

Schiffrin (1987:18) は、前述の POSITION、SUPPORT、DISPUTE という談話構造に関して、DISPUTE は (a) 先行する命題内容の正確さへの反論である場合と、(b) 先行する事実や特定の態度に対して話者／書き手の意見を対立させる場合の両方があるとしている。この分類は、新聞論説を対象とした *Bolivar* の分析にもあてはめることができる。

すなわち *Bolivar* は、V のターンを (1) *concluder*、(2) *prophecy*、(3) *directive* の 3 種に分類し、(1) の内容は論理的な結論や情報の陳述、(2) の内容は未来の予言、(3) の内容は望ましい方向の提示であるとしている。これを Schiffrin の分類にあてはめると、Schiffrin の (a) は *Bolivar* の (1) に、同じく (b) は (2)(3) に該当すると考えられるであろう。そして本論においても、**but** が導く談話について、(a)=(1) のように命題内容から生じる論理的帰結を陳述するのみで、話者／書き手の「評価 *evaluate*」が含まれない場合と、(b)=(2)(3) のように話者／書き手の意見としての「評価」が含まれる場合とが、区別できるであろうと考えた<sup>4)</sup>。

では、**but** が導く談話単位に「評価」が含まれるかどうかは、どう判断すればよいのだろうか。本論では、*Bolivar* が述べている (1)~(3) の分類基準を採用することとした。すなわち「評価」が含まれる (2) と (3) に関して、*Bolivar* は (2) *prophecy* は蓋然性の評価を示唆し、未来表現の動詞を用いることが多いとし、(3) *directive* は命令形、疑問形、行為の動作主・種類・状況の指示、あるいは *should, need, It is essential that, if...then* など、「望ましい方向性」を示す表現が使われるとしている。

たとえば以下の (7) では、**but** の導く文が疑問形であることから、また (8) では *perhaps* という「蓋然性の評価を示唆する語」が使われていることから、**but** が導く談話単位において「評価」が行われていると判断することとした。

(7) Tn S

- |   |   |   |
|---|---|---|
| L | 1 | To many people around the globe, East Timor is a remote and unfamiliar place.   |
|   | 2 | Perhaps the island's greatest claim to fame is that it served as the landfall where Captain Bligh, of "Mutiny on the Bounty," found haven after 41 days adrift in the South Seas. |

- F 3 Indonesia invaded the territory in 1975, after Portuguese colonial authorities withdrew, and its military has been fighting insurgents ever since.
- 4 Few outsiders had paid attention to the territory until Aug. 30, when an overwhelming majority of East Timorese voted under U.N. auspices for independence.
- L 5 Then pro-Indonesian militias, backed by Army units, went into a frenzy of murder, forced expulsions, looting and mayhem.
- F 6 Nobody would mistake East Timor for a major strategic asset, and nobody can argue that the vital interests of any major power are threatened.
- V 7 But does that make the nameless people there any less important, say, than those in Kosovo?

(*Newsweek*, September 20, 1999, p. 10)

(8) Tn S

- L 1 There are thrills but no spills here at the Karting Mall.
- F 2 In fact, each car is equipped with a seatbelt, an extra-wide body to prevent roll over, even the emergency off switch.
- V 3 But perhaps the most impressive safety feature is something I can't show you.

(NEXT@CNN, July 13, 2002)

以上、2.2.1 から 2.2.3 で示した方針に基づき、以下の 3 つの視点からサンプルを分析していくこととする。

- a) **but** のセンテンス・レベルの意味は「対比」か「期待の否認」か。
- b) **but** は LFV のどの談話単位を導くか。
- c) **but** が導く談話単位に、事実や特定の意見に対する話者／書き手の評価が表明されているか。

以上のルールに基づいてサンプルを分析した結果が表 2 (p. 106) である。同時にサンプルの日本語訳において **but** がどう訳されているかについても調べた。



表2 サンプルの分析結果

テキストタイプ	題名	Butの数/ 全体のword数	センテンス・レベル (but)		談話レベル (But)			
			対比	期待の否認	談話単位内	Lを導く	Fを導く	Vを導く
報道文	NW-1	9/1523		2		1 (1)	5 (2)	1 (1)
	NW-2	7/3509		1			2 (1)	4 (3)
	NW-3	6/1873		1		2 (2)	2	1
	NW-4	13/1788		6 (1)			2 (1)	5 (3)
	NW-5	14/3129		7 (2)	1	1 (1)	3 (2)	2 (2)
	NW-6	12/2210		3 (1)	1		2 (1)	6 (3)
	CNN	4/2094		2		1 (1)	1 (1)	
計		83/22640 (0.3666%)		31 (5)	2	5 (5)	19 (9)	26 (17)
					52 (33)			
小説	Bierce	18/5856		14		1 (1)	1	2
	Steinbeck	29/7673	1	27 (1)			1	
計		47/13529 (0.3474%)	1	41 (1)		1 (1)	2	2
					5 (1)			
和訳	報道文	NW		。だが 5(1) が、 10(1) 省略 4(2) しつつも 1 ものの 1 にもかかわらず 1	。だが 1 に対し 1	。だが 3(3) 省略 1(1) しかし 1(1)	。だが 8 (3) が、 2 (1) 省略 4 (2) しかし 2(1) ただし 1(1)	。だが 13(8) が、 2(1) とほやえ1(0) もつとも1(1) ただし 1(1) それだけで はない 1(1)
		CNN		しかし 1 しかしながら3 省略 3 が、 2(1)			しかし 2(1)	しかし 1(1) しかしながら 2(2) 省略 3(1) 。でも 1(1)
	小説		が、 1	が、 36 (1) しかし 3 ではなく 1 ばかりか 1		。だが 1(1)	。だが 1(0) が、 1(0)	。だが 1(0) が、 1(0)

\* ( ) は「評価」を導く but の数。

\*\* 「談話単位内」は談話単位内の複数のセンテンスの途中で文頭の But が出現した例。

### 3. 分析結果

表2に見るとおり、ワード数あたりの but の使用頻度は、報道文のほうが小説よりもやや高い<sup>2)</sup>。But の使用頻度は、Biber et al. (1999) によれば論文よりも会話やフィ

クションで、Oshima & Takahashi (1996) によれば新聞の論説で高くなると指摘されており、本調査の結果と大きな違いはない<sup>3)</sup>。そこで以下では、報道文と小説における **but** の使われ方の違いを、頻度よりも内容から分析することで明らかにしていく。

### 3.1 センテンス・レベル

表 2 に見るとおり、センテンス・レベルにおける **but** の機能は、報道文でも小説でも、前件と後件が連結命題となる「対比」の用法がきわめてまれで、「期待の否認」が圧倒的多数を占めるという点で共通していた。また表 2 で談話レベルとされた **but** についても、隣接する 2 つのセンテンスに注目すれば、すべて「対比」ではなく「期待の否認」の用法と分類できる。このことから、センテンス・レベルにおける **but** の意味が、テキストタイプによって異なるという事実は見いだせず、両者の違いが談話レベルにあることは明らかである。

### 3.2 談話レベル

表 2 から、報道文は小説と比べ、**but** が談話展開の道具として（すなわち文頭の **But** として）用いられることが圧倒的に多いことがわかる。むしろ、センテンスを談話構造の最小単位とする Bolivar (1994) の分析法は絶対ではなく、センテンスの区切りがセンテンス全体の長さや文全体のリズムなどの条件に左右されている可能性も否定できない。しかし、イントネーションに基づいてセンテンスの区切りを決定している CNN のトランスクリプトにおいて、LFV のパターンが比較的きれいに抽出されることから（後出 (9) 参照）、センテンスを談話の最小単位とする Bolivar の分析には一定の妥当性を認めることができる。

そこで「文頭の **but**」を LFV という談話構造の視点からみると、その半分以上が F、3 分の 1 以上が V の談話単位を導いていることがわかった。

もちろん、報道文の談話構造がすべて LFV パターンできれいに分析できるとはかぎらない。調査の過程で、小説では L や F がえんえんと繰り返され、V が出現することがまれであることがわかったが、こうした小説的な談話展開は報道文において皆無というわけではない。またサンプル中には、Bolivar が LFV 構造の変種と指摘している、日本的な「起承転結」（四段階式の論述）がじっくり来る談話展開も見られたし、Mann & Thompson (1988) が指摘するように、談話の中心である核 **nucleus** がサテライト **satellite** に先行するパターン——すなわち LVF のような談話展開——も散見された。

しかし LVF パターンによる *Newsweek* のデータの分析が比較的スムーズに行えたこと、また放送におけるニュース報道、特にキャスターのコメントなどに LVF パターンが明らかに見て取れたことも、LVF パターンによる分析の妥当性を裏付けている。(9) は文頭の **but** を使った文例ではないが、LVF パターンできれいに分析できる CNN の文例である。

(9) Tn S

L 1 In East Africa, mountain gorillas number only a few hundred, but they're now considered relatively safe in protected areas.

F 2 Most of the world's gorillas, the Western species, are found in the forests of Central Africa, in six countries.

V 3 And, according to scientists at a recent gathering of the world's top gorilla experts, the most immediate threat to Western gorillas is not destruction of habitat, but the intensity of widespread commercial poaching.

(NEXT@CNN, June 29)

以上の分析から、報道文の **but** は談話レベルで、しかも LFV の総括部分である F ないし V を導く場合が多いことがわかった。次節では報道文の **but** が F や V を導くことが多いという事実と、話者・書き手の発話内行為との関係を明らかにする。

### 3.3 話者・書き手による評価の有無

2.2.3 で述べた「話者・書き手による評価の有無」という発話内行為からの分析では、表 2 にみるように、報道文における **But** 文ないし **but** 節が、小説と比べて「話者・書き手の評価」を含んでいる場合が多いこと、またその傾向が談話レベルにおいて顕著であることがわかった。

さらに LFV の各談話単位について見ると、「評価」の出現頻度は V、F、L の順で多く、3 段階式の談話構造の総括部分で、**but** によって「評価」が導かれることが多いことがわかる。

また **but** が談話単位 L を導く例は 5 例と少なかったものの、そのすべてに「話者・書き手の評価」が見られた。これは LFV の上位構造である SDR (2.2.2 参照) の各単位を **but** が導いているためと考えられる。SDR の冒頭に **but** が出現する比率は、S:D:R が 1:2:2 であったが、この比率は LFV の各談話単位の冒頭における **but** の出現比率とほぼ同じであり、報道文の **but** がより上位の談話構造においても同様の機能を果たしていることがわかった。

## 4. 結論

以上の分析を総合すると、報道文における **but** の使用は、LFV ないし SDR という 3 段階式の談話構造の総括部分を導くと同時に、そこに「話者・書き手の評価」が重ね合わされているところに特徴があると言えるであろう。

これに基づいて **but** の訳し方を見ると、小説では特に談話レベルにおいて「。だが」と「が、」がほとんどすべてを占めているのに対し、報道文では *Newsweek* で「。だが」

「が、」、CNN で「しかし（ながら）」が多く使われていることがわかった<sup>4)</sup>。そしてそれ以外の訳語は、「期待の否認」の **but** や「V を導く」**but** において多く見られた。ただし「期待の否認」では「評価」を含まない文例で、「V を導く」**but** の場合は「評価」を含む文例で、そうしたバリエーションが認められた<sup>5)</sup>。これは、報道文における **but** の特徴である「LFV 構造の総括＋話者／書き手の評価」を導くという機能を、訳語の工夫によって標示しようとする努力の現れかもしれない。

しかし同じ報道文でも、CNN の放送通訳では訳語のバリエーションがあまり見られず、**but** の訳が省略される場合も多かった。これは原文と訳文との一致が重視されているためとも考えられるし、**but** の訳がかなり省略されていることから考えれば、放送通訳においては時間的制約から、談話構造そのものにより大きな変化が加えられている可能性も考えられる。今後、より多くのデータに基づいて分析を行うことを課題としたい。

謝辞：本稿の掲載に際し、査読者および編集委員の皆様から有益なご指摘・ご助言をいただきましたことを深く感謝いたします。

---

著者紹介：田邊希久子（たなべ きくこ） 2001 年 3 月青山学院大学大学院国際政治経済学科国際コミュニケーション専攻修士課程修了。論文：「Identity という語の意味分析—翻訳との関連から」『青山国際コミュニケーション研究』第 5 号。専門研究分野：通訳・翻訳論。E-mail: <pec03040@t.toshima.ne.jp>

---

#### [註]

- 1) 比較のため、センテンス内で使われている **but**（文中の **but**）についても、それが導く節に「評価」が含まれているかどうか、同様の分析を行った。
- 2) *Newsweek* 日本版では編集段階で原文の一部を削除するため、表 2 の報道文における **but** の使用頻度は、実際には表に記載した数字よりやや高く、0.4046%となる。
- 3) Oshima & Takahashi (1996) によれば、各ジャンルの頻出接続語は以下のとおり。

数学	論説	小説（地の文）	小説（登場人物のセリフ）
1 then	but	presently	and
2 hence	however	then	now
3 therefore	in fact	but	but
- 4) サンプル全体において、**But** が文頭に来る場合は「。だが」、文中に来る場合は「が、」と訳されることが多く、センテンスの区切りは翻訳後もほぼ維持されることがわかった。しかし「期待の否認」の **but** では、訳文で先行発話と後続発話が別々のセンテ

スに区切って訳されている場合がかなり見られた。

- 5) 「期待の否認」の *but* において訳語のバリエーションが見られる理由は興味深いテーマであるが、本論の中心的課題とは関係が薄いため、機会をあらためて考察の対象としたい。

#### [引用文献]

- Biber, D., S. Johansson, Leech G., Conrad S. & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. [New York]: Longman.
- Blakemore, D. (1989). Denial and contrast: a relevance theoretic analysis of *but*. *Linguistics and Philosophy*. 12, 15-38
- Blakemore, D. (1992). *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell. (『ひとは発話をどう理解するか: 関連性理論入門』(1994) 武内道子, 山崎英一訳. 東京: ひつじ書房)
- Bolivar, A. (1994). The structure of newspaper editorials. In M. Coulthard (Ed.), *Advances in written text analysis*. London; New York: Routledge.
- Lakoff, R. (1971). If's, and's and but's about Conjunction. In C. J. Fillmore & D. T. Langendoes (Eds.). *Studies in Linguistic Semantics*. New York: Holt, Reinhart and Winston.
- Mann, W.C. & Thompson, S.A. (1988). Rhetorical Structure Theory: Toward a functional theory of text organization. *TEXT*. vol.8-3: 243-281.
- Oshima, M. & Takahashi, W. (1996). A quantitative analysis of two types of conjunctions: 'External' and 'Internal'. *Journal of the Faculty of Education, Shinshu University*. No.88: 141-148.
- Schiffrin, D. (1988, c1987). *Discourse markers*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- 本名信行(1989)「日本語の文体と英語の文体」『講座日本語と日本語教育 5』(pp. 363-385) 東京: 明治書院
- 松尾文子 (2000) 「談話接続語 *but* の機能」 『英語語法文法研究』 7号: 51-64.

#### [参考文献]

- Coulthard, M. (1977). *An introduction to discourse analysis*. London: Longman. (『談話分析を学ぶ人のために』吉村昭市・貫井孝典・鎌田修訳 京都: 世界思想社)
- Grosz, J. B., Pollak, M. E. & Sidner, K. L. (c1989). Discourse. In M. I. Posner (Ed), *Foundations of cognitive science*. Cambridge, Mass.: The MIT Press. (『言語への認知的接近』(1991) 佐伯胖・土屋俊監訳. 第3章「談話」片桐恭弘訳. 東京: 産業図書)
- Sperber, D and Wilson, D. (1986). *Relevance: communication and cognition*. Oxford:

- Blackwell. (『関連性理論: 伝達と認知』(1993) 内田聖二他訳. 東京: 研究社出版)
- Widdowson, H. G. (1979). *Stylistics and the teaching of literature*. London: Longman. (『文体論から文学へ: 英語教育の方法』(1989) 田中英史・田口孝夫訳. 東京: 彩流社)
- 金水敏・今仁生美 (2000)『意味と文脈』(現代言語学入門) 東京: 岩波書店.
- 甲田直美 (2001)『談話・テキストの展開のメカニズム : 接続表現と談話標識の認知的考察』東京: 風間書房
- 大内あゆみ (1990)「談話標識 **but** の分析」『筑波英語教育』11号: 49-61.
- 泉子・K・メイナード (1997)『談話分析の可能性 : 理論・方法・日本語の表現性』東京 : くろしお出版
- 光元美佐子 (1995)「談話標識『だって』の意味/機能と英語訳」13号: 29-38.
- 高原脩 (1993)「談話標識の語用論的機能」『英語青年』139号(5): 225-227.

### [資料 1: データの出典]

- NW1: Terror in the Streets, *Newsweek*, September 20, 1999, p. 10
- NW2: 'I Put My Trust in God', *Newsweek*, November 29, 1999, p. 22
- NW3: Can This Company Be Saved?, *Newsweek*, November 1, 1999, p. 40
- NW4: The Siege of Seattle, *Newsweek*, December 13, 1999, p. 8
- NW5: Russia's Mystery Man, *Newsweek*, January 17, 2000, p.24.
- NW6: JFK Jr.'s Final Journey, *Newsweek*, August 2, 1999, p.16.
- NW7: Hype and Hope for a Royal Baby, *Newsweek*, December 20, 1999, p.10.
- NEXT@CNN, Aired July 6, 2002 at 13:00 ET.
- Flight* by John Steinbeck, 1938 (『対訳スタインベック』福田実ほか訳注. 1958-1965. 東京 : 南雲堂より)
- The Death of Halpin Frayser* by Ambrose Bierce, Copyright 1909 by Albert and Charles Boni Inc., Released July 1993 by The Internet Wiretap Electronic Edition. (邦訳『幽霊』(ピアス選集□). 猪狩博訳. 1970-1971. 東京: 東京美術)

### [資料 2: NW3 の部分的分析例]

Mv	Tn	S	
S	L	1	He plans to shrink capacity in Japan by 30 percent, end Nissan's lifetime-employment system and globalize purchasing.
	F	2	"I'm awfully sorry to hear it," said a senior government official when asked by Newsweek to comment on Nissan's restructuring.
	V	3	<u>But</u> , referring to the traditional dawn alarm rung at Zen temples across Japan, he added: "It took Mr. Ghosn to come and hit the gong!"

D L 4 For many Japanese, the wake-up call is as jarring as it is inevitable.

F 5 In an editorial entitled "The Shock of French-Style Restructuring," the mass-circulation Yomiuri Shimbun praised Ghosn's plan, then cautioned him to "keep the resulting friction [with suppliers and labor unions] to a minimum."

V 6 Inside the company, where Renault's rescue boosted the morale of many, the fact that it took gaijin, or foreigners, to engineer a comeback plan also spawned a bit of self-loathing.

7 "When MacArthur came after World War II, the Japanese just surrendered to his leadership," said a retired Nissan executive.

8 "A similar thing is happening at Nissan today."

R L 9 But can Ghosn really fix Nissan?

F 10 If so, Renault and Nissan would form a powerful survivor in the global auto-industry consolidation now underway.

V 11 Analysts have been skeptical of his prospects ever since Renault bought its 36.8 percent stake in Nissan.

(Can This Company Be Saved?, *Newsweek*, November 1, 1999)